仙台司教区 教区事務所だより

（第　18　号）
昭和53年10月30日

ヨハネ・パウロ一世
34日の教皇在位

パウロ六世の後を継ぎ、8月26日新教皇に選ばれ、9月3日、教皇に登位されたばかりのヨハネ・パウロ一世が、9月29日、急逝された。在位僅かに34日。この衝撃的ニュースは、瞬時に世界を走り、その謙虚さと、温かい人柄とに親しみを感じて教会の指導に期待を寄せていた、全世界の人々を驚かせた。

10月14日、直ちに、次の教皇を選出するためのコンクラーベが開かれ、10月17日、全世界の下馬評をよそに、ポーランドのクラコフ大司教・ボイティワ枢機卿が選出され、前教皇の名前をとって、ヨハネ・パウロ二世と称されることになった。

神の思いは、人の思いを越えて、まことに測りがたいものである。

ちなみに、同じ年に、二人の教皇を選出したのは、四百年来のことであり、又、イタリア人以外の教皇が選出されたのも、四五〇余年振りの出来事である。

祝　新園舎落成

※　角田カトリック幼稚園

9月9日、佐藤司教司式による新園舎の祝別が行われた。同園は、約五〇〇坪の敷地を有しながら、中央に教会・園舎が位置していたため、極めて効率の悪い使用を余儀なくさせられていたが、歴代園長の悲願が実り、今回、高田徳明師の手で、園舎の移転新築、敷地の整地が行われたものである。

地域住民の要望により、昭和41年児山六七男師により発足したもので、現在、園児160名が通園している。

総工費千弐百万円。

なお、10月22日、司祭館、聖堂の祝別が行われる予定である。

司教様の日程
（9月11日現在）

9月4日　教区司祭団役員会
7日　社会福祉法人理事会
9日　角田幼稚園増改築落成祝別式
10日　男女修道会管区長合同委員会
11日　宗教法人連絡協研修会
15日　福島県カトリック信徒の集い
16日　仙塩地区壮年連盟勉強会
17日　堅信式（原町教会）
22～10月27日　渡加。カナダ布教月間に出席
10月29日　宮城県信徒大会

※聖心幼稚園

青森県五所川原市に在る聖心幼稚園（園長・ケベック会ランドルヴィル師）でも、9月16日、新園舎の祝別が行われた。昭和30年、同市最初の幼稚園として発足。以来二十三年、千七百余名の卒園児を出しているが、ようやく老朽化し、教育環境整備の必要に迫られたので、この際、新設置規準に合わせて、二教室を増し、全く面目を一新したもの。敷地五七三坪。建坪二〇三坪。工費二千余万円。

第二回 三県信徒交流会開かる

教区を越えて、隣接する三県（青森、秋田、岩手）が、〝本音を語ろう〟と昨年企画した三県信徒交流会が、今年も、8月19・20日の両日、秋田県後生掛温泉で開催された。

話題提供者として、釜石教会の小野寺氏から「家庭集会」について、体験を踏まえた話があった。そして「家庭集会」に対する関心が浮きぼりにされたような活発な質疑応答が続けられた。

次に、秋田教会の及川師が話題に関連して、「福音宣教」について信徒一人一人の宣教の重要性を強調された。信徒はもっと「福音宣教」について考える時間を持つべきであり、まずそのことに関心を持つことが望まれる、と。

最後に四ツ家教会より「岩手カトリックセンター」についての説明があって、引き続いて夕食・信徒交流の時間が設けられた。食事をはさんで、それぞれの人が知り合うこと、ここに交流会の目的が実現され、互いに異なったところに住んではいても、同じ教えを信じる者の集いはなごやかにすすめられた。

2日目の朝、一致のしるしであるミサにあずかり、朝食後、閉会式が行われた。

次回は岩手県が開催県と決まり、参加者がもっと多くなることを願いながら再会を約し、散会した。

（板垣神学生寄稿）

夏期神学講座 報告

昨夏より再開された夏期神学講座が、今夏も神学講座実行委員会主催で、「日本人の霊性とキリスト教」のメインテーマのもとに、ペトロ・ネメシェギ師（イエズス会士）を講師に迎え、8月20・21日の二晩、元寺小路教会信徒館を会場にして開催された。（受講者一四〇名）

師の二晩の講話をひとことでいえば、「日本の風土は精神的にも宗教的にもたいへん豊かな国であり、そこにキリストの福音の種がまかれ、育ち、それが豊かに実を結ぶことを確信し、日本のキリスト者は百パーセントのキリスト者になれる、いな、いま、現にいる」という力強いメッセージであった。

講座そのものに対する注文として諸氏からうかがったことをまとめると、次の三点になるかと思われる。①受講料（一講話千円）が高くて友人・知人を誘えなかった。②講座を有志主催でなく、教区主催のきちんとしたものにすべきだ。③講座を

無料受講にし、そのために運営基金を設けてはどうか。

なお来夏は、8月18・19の両日、奥村一郎師（カルメル会）を迎えて行う予定である。

日本カトリック医師会 仙台支部総会

仙台司教区に在住するカトリック医師の第三回総会が8月26日、福島県岩代熱海町、太田綜合病院熱海病院において開催された。

総会には、仙台司教区の医師会員の外、東京大司教区、札幌司教区の会員も参加。総員三十数名を数え、佐藤司教も出席して、盛会裡に行われた。

議題として、今年は「安楽死」が取り上げられ、仙台司教区宮城支部の星先生、東京大司教区の岡田支部長の講演発表があった。共に、カトリック信者としての医師の立場から生命の尊厳と霊魂の救いという重大な問題に直面して、医師としていかにあるべきかを論じたもの。

ついで、各会員が、各自経験した病例についての医学的考察に関して意見を述べ、有意義な討論・質疑が行われた。佐藤司教も、神学的立場から、生命に向かう医師の姿勢について希望を述べられ、大いに示唆するところがあった。

今回の総会の特徴は、仙台司教区カトリック医師会と同時に、日本カトリック医師会の理事会が同時に行われたことである。東京、東北、北海道の各カトリック医師会の理事が参集し、熱心な協議・討論の後、カトリック医師会の今後の方向、運動方針が決められた。

（カトリック医師会報告参照）

＊＊＊＊

土井文雄師 表彰さる

（元寺小路教会主任）

去る10月6日、土井師は、宮城刑務所篤志面接委員として、多年にわたる献身的な奉仕と、収容者の更生に寄与された功績により、仙台矯正管区長から表彰され、記念品が贈られた。

五つ位の女の子が、ネンネコの下に赤子を背負って、あやしていた。

女の子をからかうつもりで、O師が言った。

「○○ちゃん、背中の湯たんぽ温かいでしょう」

これをきいて、女の子はすかさず答えた。

「うん、だけど、この湯たんぽ漏るよ」

（司祭大会でのO師の話）

＊　＊　＊

御ミサに与っていた男の子、お母さんにきいた。

「お母さん、神父さまは、どうしてえらいの？」

「……それはね、ごらん、神父さまは、あの、大きな、オスチアを頂くからよ」

（語り手しらず）

高校生サマー・スクール

（ヤング・クリスチャン トレーニング・スクール）

去る8月2～3日、青森県下各教会の高校生25名が集まって、ねむの木会館（青森市横内）で、高校生サマー・スクールが開かれた。

今年で第4回目を迎え、今年度の目標は、1.体験を通して信仰を考える。2.互いのフレンド・シップを培

う。3.ダイナミックな青年期の生き方について語る、の三点であった。

講話、奉仕作業（草取り等）、語らいの一泊二日の中で、参加者のほとんどが幼児洗礼者であるだけに、このことが話題となり、アシスタントの大学生を交えて、互いに自由な意見が交わされた。

又、高校生は、自分達が聖書・要理の理解において未熟であることを認め、受験体制下にある高校生として、受験勉強、クラブ活動とのかねあいにおいてどのようにして未熟さをおぎなっていくか、という悩める姿が浮きぼりにされた。

一泊二日という短い期間であったが、高校生自身が同世代の者と共に自らを考える、ということにおいて大いに意義深いスクールであった。

聖パウロ女子修道会のシスターズ　能代市へ

―家庭訪問の宣教に―

去る6月19日～7月20日、広島、大阪のシスター3人と仙台修道院の2人計5人の女子パウロ会のシスターは、二年前から招かれていたという秋田県能代市の家庭宣教にたずさわった。

人口4万のうち、毎日曜日にミサにあずかる信者は、子供をいれて20人という小教区司牧の奥村師（神言会）は、

「沢山の家庭を訪問するとか、本が多く読まれるとかいう数的なことにとらわれないで、ゆったりとした精神で人々との出会いを大切にしてほしい。シスター達の姿を人々が見て、〝あの人たちは何かをしている〟と思われるだけで充分です」ということで始められた。

教会で幼稚園を経営しているので、幼稚園に関係している人の多くは園の教育に感謝していて、シスターたちにも好意的であった。

この期間中、中央協議会広報室のシスター長谷川を招き、幼稚園の父兄を集めて、「本の読み方、テレビの見方」について講演会を催した。

訪問軒数は二六三六軒。

まかれた種がよく育つように、祈りましょう。

『CLC』の錬成会を体験して

『せせらぎCLC』は去る9月16・17日、東京のメンバー三名を招いて、初めての錬成会を聖ウルスラ学院家政専門学校で開きました。

5月に発足してから月2回の例会は、CLCのメンバーとしての自覚、そしてCLCとは何なのかという事すらよくわからず集まっていたように思えますが、この錬成会を通して、私達が作り上げていかなければいけないグループなのだ、という自覚が出て来、これからが本当の意味でのスタートなのではないかと思っています。

一日目は、「自分らしさ」についての黙想で、ここでは自分というものを考える基準をどこに置くかという事が問題になりました。

二日目はファンタジーによる黙想で、自分を花にたとえるとどのような花か？そこに、イエズス・キリストが来て何を語りかけてくれたか、ということを思い浮かべる。ここで

は皆、イエズス様がとても身近に感じられたようでした。

CLCの発展段階は、仲間への呼びかけに始まり、自已確認、親しみ（仲間）、生活へのチャレンジ、回心、和解、一致、コミット、そしてミッションによって再び呼びかけが始まります。

私達は、まだほんの呼びかけの段階でしたが、この錬成会をきっかけに自已確認という段階に少しでも近づけたのではないかと思えるのが、大きな成果だったと思います。

（高橋洋子氏寄稿）

G・シュトルム　個展開かる

ー神の御業（みわざ）の発見ー

去る7月4～16日、G・シュトルム師（北福岡教会）の数多くの作品の中から、萱を描いた作品三十点が岩手カトリックセンターに展示された。

作品は水彩画の手法で、雪におおわれた萱を、科学的で合理的な観察力で捕え、千変万化する光を急速に凍らせたような厳しさと美しさが見事に展開されており、見る人をして改めて萱の美しさ、神の業を発見せずにはおかない説得力ある作品ばかりであった。

同師は絵を描く姿勢、苦労を次のように話された。

「天候にかかわらず行く。行けば必ず何かを描く。何も描かないのは憶病であることに気がついた。描くという決心が強い程よい絵がかける。気に入る気に入らないで描くのは乗り越えなければならない。私はロマンチストではない。日常生活のまま事務的に描く。それは二戸を自分の呼吸とする事です」。

「私は景色を描いていない、物を描く。私は物が大好きです。どんな物でも個性があふれ、神の業を発見する事が出来る。それが出来ないのはその物がつまらないのではなく、自分がつまらないからです。

絵を描きに行く時、自転車に乗ってゆるい坂を登り、一時間半程行った山村へ行く。十一時ごろ出掛け、三時ごろ戻ります。行く時は体を動かすのでまだよいが、帰る時は坂道を夕方の気温の下がった中を走るので身を切るようにつらい。厳冬には湯を持って行って絵具をとかしてから描く。かくとたちまち凍る。冬にしか出来ないことをやり、寒さが絵

ピエール・ルカバリエ師　帰天

つい最近まで、仙台司教区で働かれ、病気のため帰国療養中だったピエール・ルカバリエ師は、9月24日未明（日本時間）、カナダ・モントリオールで亡くなられた。享年36歳。

師は一九六七年来日。仙台YBU心の灯センターをかわきりに、弘前（助任）、十和田（代行）、黒石（主任）を歴任。

一九七七年復活祭の後、療養のため帰国中だった。

10月1日、黒石教会において、葬儀ミサが献げられたが、全邦人司祭も、各々一回のミサをあげて、教区のために働かれた故人に感謝をささげると共に、永遠の安息を祈った。

を助けるという面白い関係が生まれる」。

同師の作品に冬の絵が多いのは、自給自足の生活で夏は忙しく、比較的時間のとれる冬に集中してしまうためとのこと。又、自然とのふれ合いは、同師の母堂が草花にとても詳しく、子供のころスイスの草花をよく教えられ、興味をもって育ったとのことである。

なお、同師の個展は二戸、久慈においても開かれ、岩手放送の「岩手の窓」に放送された。

＊御案内

第2回市民講座

現代社会の中で
親は子のために何ができるか

期日　10月15日から毎週日曜日4回
時間　毎日曜日午前11時から
場所　岩手カトリック・センター
テーマと講師
10月15日　青少年非行の現況
盛岡警察署長・千葉昭平
10月22日　子供達と共に育つために
和賀町立仙人小学校長・長谷川好子
10月29日　少年相談の中で感じること
少年センター専任補導員・菊池松雄
11月5日　青少年期の人格形成
岩手大教授（心理学）・鬼沢　貞

インドからの手紙

去る5月、インドに旅立ったシスター梅津が、一本杉教会に便りを寄せてきた。

「（前略）8月26日11時ごろカルカッタに着きました。空港にはマザー・テレサが迎えに来て下さって、感激というより、昔から知っているおばあちゃんに会ったような自然な気持ちにひたりました。

インドの住まいは、外と内との区別がありません。つまり、はだしのまま外と内を歩く、又、サンダルをはいている人も外と内のサンダルは同じ一つのものです。コンクリートかレンガでつくられています。カルカッタでは掘っ建て小屋のような、天井のすごく低い家に住んでいます。日曜日のミサは、ベンガル語とヒンズー語のミサの一つにあずかりました。ミサには女性と子供が多く、男性はわずか。日本と同じですね。聖歌はインド風で、大変元気がよくお祭りみたいです。

28～31日の間、持病のため入院してしまいました。

ここで体験したことを、皆様におわかちしたいと思います。私が病院に入るなり、一人の婦人が手をとって祈って下さったことです。ここではホスピタルホステスという人が患者の心友となり、祈りをして下さったり、お医者さんへの取りつぎなどをして下さいます。ある時、苦しくて我慢が出来なかったので、お医者さんの取りつぎを頼みましたがダメで、その方が取りついで下さって救われました。

この時思ったのは、人の要求をきくのはどういうことかということです。本当に望んでいることを助けることが出来たら、と。（後略）」　（一本杉教会だよりから転載）

明治にキリスト教が再渡来して約百年、ようやく日本からも海外に宣教に行く人がぽつぽつ出始めました。スール梅津も元気で働かれるよう、祈りたい。何よりも私達自身が福音を生きることが、外に働く人の最大の支えになるのではなかろうか。

禁断の聖域に入った
感動の写真集！
マザー・テレサと姉妹たち
特価2千円　送料2百円
女子パウロ会発行
（仙台聖パウロ書院扱）

仙台司教区事務所だより第18号
昭和五十三年十月三十日発行
発行所　仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号　TEL 0222 22 7371